



www.tenpla.net

天文プラネタリウム

vol.
206

高梨 直紘 (東京大学) / ☆ 平松 正顕 (国立天文台)

「天文学者から見て、おススメの映画はありますか?」天文学以外のお仕事をされている方とお話すると、結構な頻度で問われる質問です。宇宙をテーマにした映画は、史実をもとにしたものからSFまでいろいろありますが、私がお答えするのはいつも「コンタクト」。アメリカの惑星科学者であり宇宙の面白さの伝道師でもあったカール・セーガン博士の原作を、ジョディー・フォスター主演で1997年に映像化したものです。アレシボ電波望遠鏡やアメリカ・ニューメキシコにある電波干渉計VLAで地球外知的生命を探す主人公エリー・アロウェイが、科学界の重鎮、宗教家、財界、政府などとの複雑な関係の中で「コンタクト」へと向かいます。科学とは何であるのか、科学の意義とは何であるのかを問うような場面もあり、セーガン博士の科学との向き合い方までも垣間見える傑作といえるでしょう。原作を読んだのはたしか大学生のころで、映画も何度か見ましたが、今回久しぶりに見直してみました。

科学と宗教の関係などはきつといろいろなところで論じられていますが、電波天文学を専門にしてきた筆者(平松)としては、やはり電波天文台の描写が気になる場所。もっとも有名なのは、エリーが電波望遠鏡の前でヘッドホンをして信号を聞いている場面でしょうか。ふつうの電波天文学者は信号をモニタ上に表示させて見るので、音で聞くことはありません。が、映画の中では、目の見えない電波天文学者が音に変換した信号を聞くことによって誰も気づかなかった信号の構造を発見する、という描写があります。これは実は完全なフィクションとも言えません。国立天文台にも滞在していたこともあるワンダ・ディアス・メルセドさんは、目に障害がありますが、観測データを音に変換して時間変動する天体の素性を調べるための技術開発を進めています。この技術に関するワンダさんの最初の文献は2005年のものですから、映画「コンタクト」で描かれた手法は時代に先駆けたものだったと言えるでしょう。

アレシボの300m望遠鏡は残念ながら老朽化によって崩壊してしまいましたが、一方のVLAは今も活躍中。私も2005年に現地を訪問し、ご多聞に漏れずエリーの真似をしてアンテナの前でヘッドホンをつけた写真を撮りました。VLAを訪れる天文学者の定番記念写真のようです(本誌2006年7月号参照)。

アルマ望遠鏡の広報担当になって思うのは、望遠鏡をロケ地として使ってもらふことの大変さ。VLAは非常に感度の高い電波望遠鏡で、電波を出す機械を周辺で使うことが厳しく制限されています。そんなところに大人数が来て映画を撮るわけですから、しばらく観測を止める必要があったことでしょう。成果を続々と出しているVLAを一時的にでも止めることは、科学成果創出の面からすれば損失。一方で、セー

今月のお題

映画コンタクト再訪

天文学の中でもなかなかなじみがなくてわかりにくい電波天文学が主役になった映画「コンタクト」。電波天文学の仕事を始めたからこそ気づく面白さや苦労が、この映画には詰まっています。



コンタクトにも登場したVLA。映画ではCG合成でアンテナの数が増やされていたそうです。(Credit: NRAO/AUI/NSF)



原作の小説「コンタクト」。映画とは少し違う部分がありますが、こちらもおすすめて。

ガン博士原作の映画に、宇宙と向き合うための人類最高の装置としてVLAが登場することは、知名度の向上や社会からの支持の獲得という面ではメリットは非常に大きいと言えます。「アルマ望遠鏡を1週間止めて映画撮らせて」という打診が来たとしたら、きっとプロジェクト内で大激論になってしまうことでしょう。おそらくVLAでも様々な議論が交わされたのでしょうが、VLAはこの映画以外にも「ターミネーター4」やボン・ジョヴィのミュージックビデオなど多くの作品に登場しますので、社会的なメリットは十分に理解しているようです。VLAを運用しているアメリカ国立電波天文台が2013年に作ったVLA紹介映像“Beyond the Visible: The Story of the Very Large Array”ではジョディー・フォスターがナレーションを務めていますので、しっかり元は取った、ということかもしれません。

「コンタクト」は何度か見ていますが、電波天文学の周辺で仕事をしていることもあって、その時までの自分の経験によって新しい気付きがあるのも面白いところです。また折に触れて見直すことになる映画です。